ているが、誰れとも見当もつかない、そのうち上顎が総入歯であることが発見され、影浦教授であつたか、解剖の池田吉人教授が総入歯であつたぞと言い出した。そのうち又ハンカチーフらしい布片の片角に、洗濯屋が書入れた文字の一部が〃ケダ〃と読みとられた。そこで今一度頭蓋を見なおすと、なるほど池田教授の面影が伺われ、まごう方もない。

原爆の翌日ひるすぎ、大学病院の焼跡の仮本部に居た私に、山里小学校の校庭から〃自分は大学の池田であるが負傷しているので、救助に来てほしい〃との伝言を齎した者があつた。早速学生教名が担架を持つて出里校に行たが、夕方帰つてきて、附近の防空壕まで探したが見当らなかつたとのことであつた。

その後何の手がゝりもないので、どこかへ救護班にでも運び去られ、自ら連絡もできずして死なれたか——当時そんな行方不明者が多くあつた——と思はれていた。そこで慰霊祭の日に偶然発見されたお遺骸の状況から察すると、教授は山里小学校の校庭で、救助のことを伝言されたあと、漸くうらの墓地まで自力で辿りつかれ、そこで気力つきて逝かれたものらしい。墓地に向われたのはそこが御自宅のはるかに見える地点であつたからであろうと思われる。

あゝしかし、その時御宅は已に倒潰して、奥さまと赤ちやんは即死され、一人生残られた十一才の嬢ちやんも佐藤純一郎助教授の宅に八月十日に引きとられて一週間目に亡くなられたのであつた。

（古屋野記）

解剖學第二教室

当時は高木純五郎教授、小野直治、呂雲龍の両助教授が勤務中であつた。

被爆時の狀況

高木教授は研究室で、小野助教授は解剖学を講義中、呂助教授は研究室で被爆。

高木教授は救出され外科横穴壕で治療を受けるも終始興奮裡に十一日夕方死去さる。

又解剖学講堂の教壇に小野助教授の遺骨を確認、呂助教授も研究室にて殉職す。

故 高木純五郎教授略歴

正四位勲三等医学博士　解剖学教授

明治二十九年五月三十一日岡山県に生る
大正十一年七月東京帝国大学医学部卒業
大正十二年四月長崎医科大学助教授に住ぜらる
大正十二年五月解剖学研究のため欧米に留学同十四年十月帰朝す
大正十四年十二月長崎医科大学教授に住ぜらる
昭和十年五月欧米各国に出張を命ぜられる
昭和十六年四月陞叙高等官一等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾の爆撃をうけ十一日鬼籍に入り職に殉ず

主なる研究題目

脊髄の細胞構築学的研究

死亡者の官職及び氏名

官職	氏名
教授	高木純五郎
助教授	小野直治
〃	呂雲龍

以下不詳

思ひ出

小野壽子

当時主人は長崎医大助教授、附属医専教授、学生主事など兼任致しておりました。

その日は附属医専一年生二百名に解剖学の講義をしていた様です。その講議を受けていた学生さんの一人（佐賀県神崎町五、原さん）が不思議に二・三日生きのびて郷里へ帰られて亡くなつたそうですが、その方のお母さんからお知らせ下さいましたところによりますと、

十一時二分、ピカツと光った瞬間、小野先生が光った窓を見られた。それからあとは、一瞬に破壊され、恐らく先生も友人もそのまゝだつただろう。自分は窓から吹きとばされ山の方へ逃げた。そこで兄と一緒になりたんかにのせられて佐賀へ帰つたとのことでした。

その後、学校の方で、教壇のあつた場所の遺骨が小野のだろうというわけで、ほんの二・三片の骨を拾つて封筒の中へ入れて下さつていました。従兄の三菱造船所へつとめていた者がそれを受け取り疎開先の四国へ届けてくれた次第でございます。

私も一度主人最後の場所におまいり致したいと存じておりますものの、子供達の教育に追われ未だに実現出来ません。早いもので十週年を迎えました。幸い私も遺児三人も元気で過しております。子供の教育の為に二十七年三月より上京致しております。

（手紙より抜萃）

小野先生の想い出

西森一正

今、基礎教室にはないが、原爆以前には敷地の全周に塀が繞らされ、今の運動場の西南の角に裏門があつた。小野先生は何時も門の外で本を読みながら門の開くのを待つて居られたさうだ。小野先生の研究室や教壇に於ける態度は謹厳そのもの、まことに近寄り難いものがあつた。然し個人的には全く打ちとけた方で、私は時々夕食時を選んで出かけ先生の好きな晩酌のおこぼれにあづかつたものだつた。煙草を喫われなかつたので奥様は配給煙草を酒と交換してよく手に入れられた。

臨時医専が併設されて以来の医専学生主事でそれだけに仕事も多く気苦労もされたらしいが、医専の生徒にとつてはまことに「こわい」存在であつて、便所など随分攻撃的な落書きなど多かつたが先生は平然と笑つて居られた。

大抵の人々の記憶にあるものはこうゆう面が多いと思うが、あまり皆の御存じない二、三の思い出を書いてみたい。何処の高等学校でも第一回生は相当偉物の多いものであるが先生の同期も多士済々であつたらしい。その中にあつて弊衣をまとつた応援団長が若い日の小野先生であつたと聞いて、あの実直な先生からは想像も出来ないことだつた。しかし、「時局柄、若い連中の乱暴を取締らなければならんのはつらいですよ」と私に時々もらされていたのも何だかわかる様な気がする。

九大の解剖講座を担当する様に招聘されたのは戦争も末期の頃だつたが、第三解剖（人類学）が設けられることを確約された学長の要請で当まられることになつた。人類学の講座の準備も着々進められて居り、現在私の手元にある「人工変形頭蓋概説」も講義のために印刷されたものだと記憶している。

朝鮮に渡り、支那を歩き随分厖大な人類学研究のデーターが集められていた。学生であつた私にはその内容などわかる筈はなかつたがその量に目を見張つたものだつた。東大の理学部に学位論文（数計学）を出す様になつていて、遂に先生の手の中で焼失してしまつたのであろう。

先生も奥様も私と同じ土佐の寒村の出身であり、学生の頃は事あるにつけ面倒をみて下さつた小野先生。お別れして既に十年の歳月が流れ去つた。今思い出も新たに少しばかりの面影を綴りました。

（病理学教室勤務）

生理学教室

当時の教室員は清原寛一教授、芦塚陽助教授、崎元行夫助手、橋田数綱嘱託、西村ユキ傭人、それに定夫の崎田関一氏であつた。

被爆時の狀況

清原教授、芦塚助教授、橋田嘱託、崎田、西村氏は教室内で爆死。崎元助手は家野町の寄宿先で受爆、負傷して大村海軍病院に收容さる。

故清原寛一教授略歴

従四位医学博士　生理学教授

明治三十八年二月十五日福岡県に生る
昭和三年三月長崎医科大学卒業
同年同月　長崎医科大学助手に任ぜられ生理学を専攻す
昭和八年十月長崎医科大学助教授に任ぜらる
昭和十四年七月満洲国及び中華民国に出張を命ぜらる
昭和十四年十月長崎医科大学教授に任ぜらる
昭和十八年三月陞叙高等官三等
昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭ひ即死耘に殉ず

主なる研究題目

光力学的作用に関する研究。